

テーマ：神様から主人と奴隷に与えられた責任とは何か？

「ローマ帝国には6,000万人の奴隷がいたと見積もられています。パウロの時代、ローマ市民はある種のひどい怠惰に陥っていました。ローマは世界の支配者であったため、働くことはローマ市民の尊厳に反するものだったのです。そして実際、ほとんどの仕事は奴隷が担っていました。医師や教師、皇帝の親しい友、手紙や嘆願書、財政を扱う秘書官でさえ奴隷でした。多くの場合、主人と奴隷との間には深い忠誠心と愛情の結びつきがありました。小プリニウスは、愛する自分の奴隷が何人か亡くなったことで非常に心を痛めていると友人に手紙を記しています。『私はいつも喜んで奴隷たちを解放してきました。また、私は彼らに一種の遺言書を作ることを許し、それをまるで法的に有効なもののように堅く守ってきたのです。』これはまさに優しい主人の言葉でした。しかし、基本的には奴隷の生活は厳しく、ひどいものでした。法律上、奴隷は人間ではなく、物と見なされていました。アリストテレスは、主人と奴隷の間には決して友情など存在しない、なぜなら彼らには何の共通点もなく、『道具がただの無機物の奴隷であるのと同じように、奴隷も生きた道具である』と述べています。また、ローマの学者ウァッロも農業に関する著作の中で、農業用具を三つの種類、話す能力があるもの、話す能力がないもの、口のきけないものに分けています。そして、話す能力があるものには奴隷が、話す能力がないものには家畜が、口のきけないものには運搬具が含まれていました。奴隷とはたまたま話すことのできる動物にすぎなかったのです。法律も非常に明確でした。ローマの法律家ガイウスも次のように述べています。『主人が奴隷の生死に関わる権限を持っていることは、普遍的に認められていることである。』もし奴隷が逃げ出せば、その罰は最も良くて額に逃亡者の烙印を押されること、最悪の場合には死刑が処せられました。別のローマの作家も述べています。『主人が奴隷にすることは、不当であろうと、怒りながらであろうと、喜びながらであろうと、嫌々ながらであろうと、うっかりであろうと、慎重に考えてであろうと、故意であろうとなかろうと、それが裁きであり、正義であり、法なのです。』パウロの奴隷に対する言葉はこんなひどい背景の中で読まれるべきなのです。』(ウィリアム・バークレー)

※コロサイ 3:11

「そこには、ギリシヤ人とユダヤ人、割礼の有無、未開人、スクテヤ人、奴隷と自由人というような区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。」

○主従関係における奴隷の責任：主人に従うこと(22-25)

1. 態度：従うとはどのような姿なのか？(22-23)

▶「従いなさい」(「_____」“フポ”+「_____」“アクオ”)

●否定的な二つの態度：

1) _____のような態度

2) _____の態度

●肯定的な三つの態度：

3) _____ 態度

「人への恐れとは、単に人が私たちに与えるかもしれない危害を恐れることではありません。確かに、傷つくことへの恐れが、人から認められたいという私たちの欲求を駆り立てることもあります。しかし、バニヤンが言うように、人への恐れとは『人の好意、愛、善意、助け、そして友情を失うことへの恐れ』なのです。簡潔に言えば、それは『承認の偶像』です。私たちは『承認の偶像』、『快適さ』、『快樂』のために迫害を避けようとしています。これらの偶像は、私たちを承認を得るために妥協し、受け入れと平安を得るために悪に屈するようにと私たちを導くのです。こうして、偶像崇拜の悪循環に陥るのです。」(ニック・バツィグ)

※箴言 29:25

「人を恐れるとわなにかかる。しかし主に信頼する者は守られる。」

※ガラテヤ 1:10

「いま私は人に取り入ろうとしているのでしょうか。いや。神に、でしょう。あるいはまた、人の歓心を買おうと努めているのでしょうか。もし私がいまなお人の歓心を買おうとするようなら、私はキリストのしもべとは言えません。」

4) _____ 態度

5) _____ 態度